

すのまた
墨俣の一夜城

細野 哲弘 元 特許庁長官

(元 資源エネルギー庁長官 みずほ銀行顧問)

夜陰に紛れ、降りしきる雨を衝いて筏に組んだ木材が流れ越し、河畔で慌ただしく組み木の作業を進める人足たちの影……。

戦国の物語でお馴染みの秀吉(藤吉郎)、小六らによる「墨俣一夜城の突貫造築」のワンシーンである。

でも、ずっと気になっていた……。その一夜城の場所のことがである。

さすがにホントに一晚で出来たのかということではなく、なぜあの場所なのかということである。信長の美濃攻略において重要な拠点になり、秀吉(藤吉郎) 出世のスプリングボードにもなった墨俣での築城(築砦) 談ではあるが、でも、なぜ「其処なのか?」

現在岐阜県大垣市の一部になっている墨俣の地には、歴史の事実にはない立派な天守閣が聳えて、資料館になっている。その最上階に登って、当時斎藤氏が威を誇った金華山を望んでも、「随分遠いなあ」と思うし、尾張の信長の拠点からは「ほかにもっと近道があるのになあ」というのが実感である。

戦国三英傑の信長、秀吉、家康のうちでも、信長は筆者の故郷岐阜の人々には格別である。いずれも愛知(尾張、三河)の出ではあるが、美濃の斎藤氏を破って金華山(稲葉山)に居を構え、天下を睥睨して布武統一の志に燃えた信長は岐阜人のメンタリティに適う。そして、なにより筆者にとっては、地元の高校を卒業するまで、毎日仰ぎ見る山は金華山であり、山頂の城には信長の影を感じていた。

さて、その信長である。

信長というと、桶狭間から上洛まで一気に呵成に攻め上り、本能寺の非業の最期まで「生き急いだ」感すらあるが、その信長がなぜ美濃攻略に当たり、迂遠とも思える墨俣の地に目を付けたのか? その答えは、以前に筆者が本誌に別稿¹⁾を寄せた折に偶々調べた文献の中にあっただ²⁾。



墨俣歴史資料館



墨俣歴史資料館最上階より長良川のかなたに金華山を望む

1) 特技懸265号(2012年5月)「高須輪中の縁(えにし)」参照

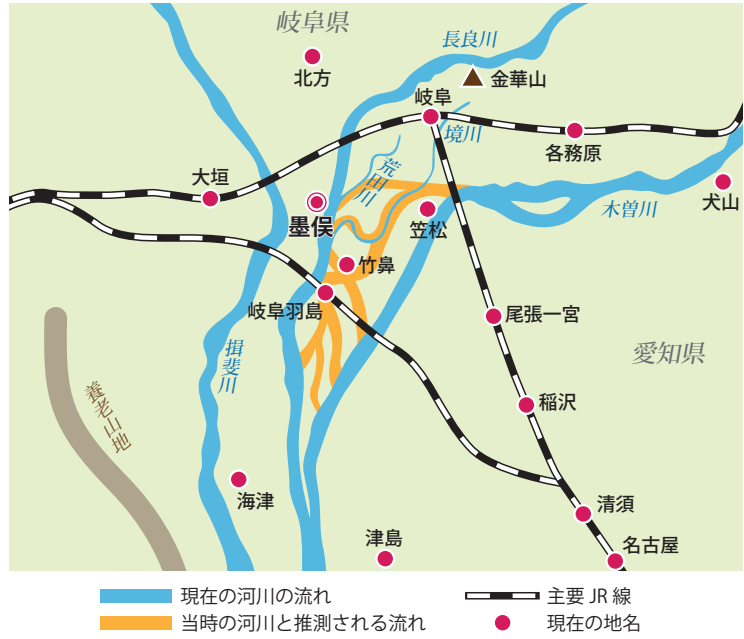
2) 墨俣の築砦については、1582年のこととする資料もあるし、そもそも事実でなかったとする説もあるが、ここでは主として「前野家文書(武野夜話)」に依った。この資料は、よほど水害に縁があるのか、昭和期の大洪水(伊勢湾台風)の後に旧家の土蔵の中から偶然発見されたことで一躍脚光を浴びることとなった。夥しい凶版や物資調達記録は相当に緻密かつ計画的な企み(ロジステックス)を窺わせ、のちの出世を予見させる秀吉の才覚が透る。因みに、砦は、佐々成政が途中で築いた土塁などを活用し、馬柵で敵を防御しつつ、三晩で築いたとされている。この資料、色々詮議の向きもあるが、蜂須賀小六や木下小一郎(のちの秀長)なども登場して、なかなか楽しい。

電撃的な桶狭間の勝利(1560年)の後も織田家内の覇権確立、尾張領内の平定には時間がかかり、美濃の攻略にも5-6年を要している。信長初上洛が1568年であり、畿内平定が1580年であるから、美濃攻略の後にはまさに怒涛のごとくにはあるが、それだけに美濃の攻略は要であった。

3) 単純に川が上流から土砂を運ぶだけだと、せいぜい海岸線に砂州を作るだけである。平野が出来るには、川が海に届く前に土砂が溜まる底の低い「お盆」のような地形を用意する必要がある。この「お盆」状の受け皿を作るのを「造盆地運動」といい、ここでのそれを「濃尾傾動運動」という。この辺りは東側の三河高原側が隆起し、西の養老-伊勢湾断層にかけて長い年月をかけて沈降している。今もなお年にコンマ何ミリというスピードで沈み続けている。したがって、断層の東の養老山地に向けて川は自然に偏っていく傾向にある。但し、凡そ高低差のないこの地での川の流道の定めには人智が及ばなかったことは、夥しい洪水の歴史が証明している。なお、「濃尾傾動運動」に関しては、学術的な文献は多数あり、墨俣の資料館にもこの地の地殻変動に関するパネルが展示されている。



州俣取手絵図(部分) 墨俣歴史資料館所蔵



墨俣付近

ポイントは二つ。一つは木曾川の大氾濫。濃尾平野は、木曾、長良、揖斐三川による典型的な堆積平野であり、縄文海進期には岐阜、大垣付近まで海岸線が入り込んでいたといわれている。三川は濃尾傾動運動³⁾の影響で総じて養老山地方面に偏っていつているが、平野の奥まで標高がほとんど変わらず、大きな川が集中するこの地域は古くから水害多発地帯であった。今でこそ笠松町辺りで南進している木曾川は、1586年(天正14年)の大洪水までは、幾つものに分流する流れのうちかなり大きなものが西走し、まさに墨俣(当時「洲股」の表記を使った)付近で長良川と合流していた。要すれば、築城(砦)されたとされる1566年(永禄9年)当時は、より西に延びた木曾川より南の、今の美濃の土地の一部は尾張であって、洲股はまさに国境沿いであった。現在の境川の下流域はほぼ当時の木曾川であったわけである。境川はまさに国の境であって、隣国を望むに当たり、墨俣の地は要路であった。

大氾濫により木曾川が今のような流れに収まったあとは、平安期からあったこの地の要路性は失われてしまった。他方、流域の変化により、旧尾張に属していた海西郡の一部が美濃に編入となった。この海西郡と石津郡を合わせた地に、のちに徳川連枝の松平家が信州から転封される(高須藩)。時代が下って、この家から福島会津藩当主に養子に出る松平容保を輩出して、幕末の表舞台を彩るとともに、岐阜(美濃)と福島(会津)とのご縁を紡ぐことになるが、それは前稿のテーマに戻る。

もう一つは、斎藤方有力者の調略に関係する。この時代の歴史というと、戦闘・合戦ばかりに目がいきがちだが、相手方の内応(離反)を取り付けるなど「力づくでない知略工作」も重要であった。斎藤家は父道三を倒して城主となった義竜のあと幼主龍興の時代になっていたが、国人の結束・抵抗は強く、堅牢稲葉山城の攻略は容易ではなかった。信長の命を受けた秀吉は、洲股を拠点に斎藤氏家臣団の攪乱に入る。俗に言う「西美濃三人衆⁴⁾」たる斎藤方の重臣の一人安藤守就に渡りをつけ、彼を通じた三人衆調略により稲葉山攻略への「道筋」をつけたのは、洲股とその周辺を拠点にした秀吉の工作の成果である。

その際登場して活躍するのが、安藤の娘婿である竹中半兵衛重治であり、これを機に秀吉の出世の立役者になっていく。最近黒田官兵衛ブームだが、地元ではもちろん、消息筋では「天下人秀吉を支えた二兵衛」のほうが通りがよい。だが、それも本稿の趣旨の外である。

随分と迂遠な「素人歴史探偵」談になってしまった。講釈として正しいかどうか甚だ怪しい。ただ、こうした悠久の流れの中の一コマとして生かされてきた自分や祖先を想うのも一興。さらに、信長が、彼が好んだ敦盛「人生五十年……」を地で行くように斃れた49歳という歳を、10年ほど前に我が身が実際に迎えてみて、にわかに自らの行く末などを想い、「余生に綾」を求めんと、やったことのない嗜み事などを始めたことを顧みて、苦笑する今日この頃である。

4) 安藤守就、氏家直元(卜伝)、稲葉良通(一鉄)のことを言い、斎藤家離反の際に行動を共にした不破光治を合わせて「西美濃四人衆(斎藤家四家老)」ともいう。